

「湖南の扇」論——黄六一を糸口にして

On The Fan of Hunan : With Huang Liuyi as the perspective

王 書瑋

WANG Shuwei

要旨 「湖南の扇」は芥川の第八番目の、生前最後の短編集『湖南の扇』のタイトルになっている作品で、芥川の晩年における重要な作品である。この作品はすでにいろいろな角度から解読されてきたが、登場人物の3人の女性、含芳、林大嬌、玉蘭の人物造型と土匪の黄六一の関係が依然としてわかりにくい。黄六一は女性たちとの関わりを示す大切な人物であるため、明確に捉えることが重要である。また、題名ともなっている「扇」が何を象徴しているのかという問題もある。本稿の目的は作品における女性3人と黄六一の人物造型、及び、扇の象徴するものを明らかにすることによって見えて来る、この小説のテーマを追求することである。方法として作品を都市空間の中に還元し、読むことによって、登場人物を分析する方法を採る。同時に、「湖南の扇」の象徴性は、登場する含芳と歴史性とを結びつける視点から究明して行く。

キーワード 湖南の扇 黄六一 革命

一

「湖南の扇」は大正十年の中国旅行の見聞を材料にして、大正十五（一九二六）年一月に『中央公論』によって発表された小説であり、芥川の中国旅行から四年余の歳月を経て後の作品である。作品の名前はそのまま芥川の第八番目の、生前最後の短編集『湖南の扇』のタイトルにもなっている。主要登場人物は僕・譚永年・玉蘭・含芳である。典拠はメリメ「コロンバ」「カルメン」、佐藤春夫の「女誠扇綺譚」とされている。なお、草稿が『芥川龍之介資料集』^②に収められている。

この作品についての今までの先行研究はすでに一定の蓄積がある

が、その殆どがヒロイン玉蘭を「負けぬ気の強い」「情熱に富んだ」湖南人として捉え、或いは、当時の湖南の混沌たる社会情勢、革命の雰囲気^①を反映した作品として評価している。例えば、塚谷周次は「湖南の扇」論考——芥川竜之介晩年の位相——^③という論文の中で、「この地で目撃した最大のものは、何よりもこの地方の革命的雰囲気なのであった。」として、湖南の「革命的雰囲気」を指摘した。渡辺芳紀の「第八短編集『湖南の扇』は玉蘭の「心意気」と芥川の晩年の位相との関連性に焦点をおき、「へわたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味はひます」という、「負けぬ気の強い」〈情熱に富んだ湖南の民〉玉蘭の心意気を味わうべきであ

ろう」と指摘し、これは「心身ともに弱っていた芥川が一つのあこがれとして書いたものであろうか。」と指摘した。また、神田由美子⁵は「湖南の扇」の真の主題を、「作中に散りばめた幾つかの謎によって、芥川が激動の中国という異国を通して知った、現実の不気味さを描くことにあつた」とし、作品のテーマが謎の中にあると指摘した。溝部優実子⁶は「扇」の解読に中心をおき、「扇」への態度は、含芳の「扇」の意味性を読み解く意志の欠如、その背後に隠されているドラマへの無関心を象徴している」とし、「長沙の「小事件」には、当時の中華民国の社会情勢にかかわる深層が、抱え込まれていた可能性を見逃すことはできない」と指摘した。そして、中国人研究者の施小焯⁷と単援朝⁸は「湖南の扇」と魯迅との関連性から、「人血饅頭」（魯迅）と「人血ビスケット」（「湖南の扇」）を比較しながら論を展開した。ほかに、近年のものとして、劉耕毓⁹の「湖南の扇」論——中国革命との関連をめぐって——という論文は作品を中国革命との関連に中心をおいて解説した。

以上を見てきたように、先行研究はいろいろな方向から論をなされてきたが、しかし、登場人物の3人の女性、含芳、林大嬌、玉蘭の人物造型と土匪の黄六一の關係が依然としてわかりにくい。そして黄六一の人物造型もわかりにくい、女性たちとの関わりを示す大切な人物であるため、明確に捉えることが重要である。もう一つの問題は「扇」に関する問題である。「湖南の扇」は湖南にやって来て、芸妓の館で過ごした時間を描き、また船で戻るという短編である。一見旅行記風の小説であるが、構成上、「起」と「結」の部分で、「扇」が二度登場し、この作品の象徴的なものとして描かれている。このように、題名ともなっている「湖南の扇」の「扇」が

何を象徴しているのかという問題を明らかにしなければ、作品を深く理解することができない。女性3人と黄六一の人物造型、及び、扇の象徴するものを明らかにすることによって見えて来る、この小説のテーマを追求することが本稿の目的である。

本稿は作品を都市空間の中に還元し、読むことによって、登場人物を分析する方法を採る。同時に、「湖南の扇」の象徴性は、登場する含芳と歴史性とを結びつける視点から究明して行く。

二

芥川の訪中時の一九二一年はちょうど中国軍閥割拠の時代にあつた。全国の主な軍閥は皖系軍閥、直系軍閥、奉系軍閥、晋绥系軍閥、桂系軍閥などがあるが、湖南には湘系軍閥と言われる軍閥があつた。湘系軍閥の代表人物として、湯芑銘、唐生智、譚延闓、何鍵、趙恒惕、程潜などがいた。辛亥革命以後、湖南は南北の軍閥たちの勢力を争う戦場となつたのである。例えば、一九一七年から一九一八年までの南北戦争、その後の譚延闓と趙恒惕との間の譚趙戦争、趙恒惕と吳佩孚との間の湘鄂戦争が挙げられるが、連年の戦火は湖南の民人を苦しめた。このように苦しめられた湖南人はいろいろな運動を起こして自分自身を救おうとした。例えば、辛亥革命（一九一一年）、二十一条反対運動（一九一五年）、五四運動を声援する五七運動（一九一九）などの運動が挙げられる。湖南のこのような社会情勢の下、芥川は湖南を訪れたのである。そして、その四年後、湖南旅行の産物として「湖南の扇」が書かれた。作品の冒頭に、以下のような書き出しがある。

広東に生まれた孫逸仙等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黄興、蔡鍔、宋教仁等はいずれも湖南に生れている。これは勿論曾國藩や張之洞の感化にもよつたのである。しかしその感化を説明する為にはやはり湖南の民自身の負けぬ気の強いことも考えなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小説じみた下の小事件に遭遇した。この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるのかも知れない。

右の引用文の前の二行を読むと、芥川と思われる「僕」は湖南省の革命情勢が敏感に感じ取れたことが分かる。そして、「目ぼしい支那の革命家」の「感化」を受けた湖南人を説明するために、「僕」が湖南で遭遇した「小事件」を挙げた。ここまで読めば、読者は当然「小事件」を革命家に関係している事件として想像する。しかし、後の文章を読むと、「小事件」は革命家ではなく、土匪に関する話であることがわかる。この設定には矛盾がある。つまり、革命家と土匪の話は同じ次元の話ではないという矛盾である。この矛盾をどう解消するかは作品を読み解く鍵となるのであろう。革命家と土匪の矛盾を解消するには、土匪の黄六一には革命家の性質を持っているかどうかによると思われる。それを考察するために、「小事件」のきつかけとなる人物黄六一の人物造型を見ていかなければならない。まず、譚永年の話の中に出てくる黄六一を次に挙げる。

①その仲間の頭目は黄六一と言ってね。——ああ、そいつも斬られたんだ。——これが又右の手には小銃を持ち、左の手に

はピストルを持って一時に二人射殺すと言う、湖南でも評判の悪党だったんだがね。……

②黄の平生密輸入者たちに黄老爺と呼ばれていた話、又湘潭の或商人から三千元を強奪した話、又腿に弾丸を受けた樊阿七と言う副頭目を肩に蘆林譚を泳ぎ越した話、又岳州の或山道に十二人の歩兵を射倒した話

③そいつは殺人擄人百十七件と言うんだからね

④黄などは知れたものさ。何しろ前清の末年にいた強盜蔡などと言うやつは月収一萬元を越していたんだからね。こいつは上海の租界の外に堂々たる洋館を構えていたもんだ。細君は勿論、妾までも、……

右の文から、黄六一という人物を以下のように捉えることができる。①では、黄は斬首された土匪の頭目であり、すごい業を持っている「評判の悪党」であることが語られた。②では、黄の悪行が羅列されているが、その内実を見ると、必ずしも悪行ばかりではない。特に樊阿七を救出する話は義侠の行為だと言つてもいい。また、「十二人の歩兵を射倒した」話からは、黄は反政府側の人間であることがわかる。ここでは反政府側という情報が非常に重要である。③では、殺人擄人の件数だけを挙げているが、その内実が語られていない。例えばどんな人間を殺したのか、どんな人を擄ったのか。④からは、黄にも妾がいることを暗示し、玉蘭の出場の伏線を張つたことが分かる。では、譚からこのような黄六一の話聞いた「僕」の反応はどんなものか。関係部分を次に挙げてみる。

⑤ 幸い血の匂よりもロマンティックな色彩に富んだものだった。
 ⑥ 譚は殆ど黄六一を崇拜しているのかと思う位、熱心にそんなことを話しつつづけた。

⑦ 僕も勿論僕自身に何の損害も受けない限り、決して土匪は嫌いでなかった。が、いずれも大差のない武勇談ばかり聞かされるのには多少の退屈を感じ出した。

⑧ 土匪も洒落れたもんだね。 (傍線引用者 以下同)

右の「ロマンティック」「崇拜」「嫌いではなかった」「武勇談」「洒落れた」などの言葉から、「僕」は黄六一という土匪に悪いイメージを抱いていないことがわかる。しかし、ここからは、黄六一は反政府側の人間ではあるが、革命家である手が見つかからない。すると、革命家と土匪の矛盾が依然として解消されていない。では、黄六一には革命性があるかどうかを次に見ていく。

青柳達雄は「芥川龍之介と近代中国(承前)」の中で、「土匪」について次のように述べている。

中国における歴史社会的な用語としては、「匪」とは、「官に對する者」(魯迅「堅壁清野主義」1926.1『新女性』)としてあり、「後世、革命者と称された人でも、その運動の中で「匪」として葬られた例は文字通り無数である。(中略)

「土匪」は、官僚や地方の地主などに対して強い反感を持っていたから、「財産の平均」ということを「極めて卑近な要求」として身につけ、それが「土匪群の共產主義への流れ込みを可能ならしめた」というのである。今日、中国紅軍が最初に湖南、

江西省境地方に拠っていた頃には、その地方の「土匪」の合流が見られたというのは周知の事実であろう。

(『関東学園大学紀要』第十六集 一九八八・十二)

右の文を読めば分かるが、中国の「土匪」は「官に對する者」であり、「革命者と称された」人が「匪」として葬られた例は「無数」である。ここから考えると、「土匪」と称された黄六一にも革命性がないとは言いが切れない。この点について、溝部優美子(前出)も指摘している。溝部は「匪」が強大になる要素であるという、情報網を握る「密輸入者」の加入を果たしていたこと、「侠」の気風を有し、明らかに反体制の行動をとっていた武装集団であったことを窺い知ることができる。従って黄六一の率いる集団は、単なる無頼の武装集団ではなかった可能性が高い」と、黄六一の率いる集団は「侠」の気風を有し「ており、「単なる無頼の武装集団ではなかった可能性が高い」と指摘した。さらに、井上紅梅の一九二三年に出版された『匪徒』という本からもこの点を読み取ることができる。以下に関係部分を挙げる。

爰に明くない政府と闇い政府とあつて、明くない政府は軍人と文人が支配し闇い政府は泥棒と乞食が支配してゐる。此間に介在して雙方から苦しめられてゐるのが支那の民人である。彼等が生命財産の安全を計るには、先づ金力を以て明くない政府に依るか、或は腕力を以て闇い政府に奔るか、孰れかの道を選ばなければならぬ。本書は其闇い方の説明である。

(「解題」日本堂書店 一九二三・二)

この解題からも分かるように、当時の中国には「明くない政府」と「闇い政府」がある。お金を持っている「民人」は「明くない政府」へ、「腕力」がある「民人」は「闇い政府」へと奔る。「土匪」という言葉は往々にして「明くない政府」が「闇い政府」の人たちに対する蔑称である。また、土匪の組織である幫派は革命党と同じく反政府の組織として、必ずしも革命性がないわけではない。劉耕毓の考察によると、芥川も『匪徒』を読んだことがあり、黄六一の名前も『匪徒』に出てくる匪徒の首領黄四籟王と藍六一の組み合わせであるという。芥川が『匪徒』を読んだのであれば、黄六一の身分設定には深い意味があると思われる。実際、当時の革命団体はしばしば幫派の力を借りたりしていた。例えば「湖南の扇」の冒頭に出てくる宋教仁は『匪徒』の第一章で紹介されている「青幫」の力を借りていたことがある。関係部分を以下に挙げる。

革命の名士宋教仁、陳其美両氏が青幫の力を籍りて成功し、後ち青幫の手に依つて殺害されたことを見ると、如何に彼等の社会的勢力の偉大なることを知るべし。〔『匪徒』「青幫」〕

実は宋教仁、陳其美だけでなく、中国共産党も積極的に土匪の一部を党内に引つ張ろうとした。『中共中央文献選集』（第一冊）に次のような記述がある。

遊民及びプロレタリア階級（兵、匪、秘密党人ら）は破産した農民や手工業者たちであったため、プロレタリアの指導の下であれば、民族革命運動の中でかなり役に立つのである。

（中共中央党校出版 一九九〇）

以上を見てきたように、中国の歴史上、「匪」は単なる悪事を働く集団ではなく、反政府側の組織という政治的な一面も同時に持っている。芥川の愛読書の一つである『水滸伝』はその好例である。特に当時の湖南の社会状況を考えると、土匪の黄六一も「目ぼしい支那の革命家は、——黄興、蔡鍔、宋教仁」の感化を受けた可能性も共産党内に引つ張られた可能性も高いと思われる。そして、このような可能性は後黄六一の情婦である玉蘭のイメージへとつながっていく。

三

先行研究からも分かることだが、ヒロイン玉蘭は「湖南の扇」において重要な人物である。玉蘭の人物造型を明らかにすることは作品を読み解く上欠かせないことである。玉蘭像を明らかにするにはここでもまず、譚永年が語る玉蘭を見ていく。次に本文から関係部分を挙げる。

⑨あの女は黄の情婦だつたんだ。

⑩玉蘭と言う芸者でね、あれでも黄の生きていた時には中々幅を利かしていたもんだよ

⑪譚は玉蘭の来たのを見ると、又僕をそつちのけに彼女に愛嬌をふりまき出した。

⑫譚は大声に笑つてから、今度は林大嬌へビスケットの一片を勧めようとした。林大嬌はちよつと顔をしかめ、斜めに彼の

手を押し戻した。彼は同じ常談を何人かの芸者と繰り返した。が、そのうちにいつの間にか、やはり愛想の好い顔をしたまま、身動きもしない玉蘭の前へ褐色の一片を突きつけていた。

右の⑨から譚は玉蘭の身分を明かす役割を果たしていることがわかる。⑩は譚の玉蘭へのイメージである。特に「黄の生きていた時には中々幅を利かしていた」という描写はひとつの伏線として機能しており、現在の玉蘭の状況を暗示している。⑪からは譚が玉蘭に示す関心は並ならぬものであることが分かる。⑫は譚と玉蘭の関係性が示される場面である。譚の玉蘭への敵意は言葉の分からない「僕」でさえ分かっていたほどだ。その原因を推測すると、やはり「長沙にも少ない金持の子」の譚は「軍人と文人が支配」(『匪徒』前出)する「明くない政府」(同右)側の人間で、一方、玉蘭は「闇い政府」(同右)側の人間黄六一の情婦であるからだ。二つの陣営に属している人間は互いに敵意を持っているのはごく自然である。まして、黄六一は反政府側の人間である。そのため、譚は黄の血を染み込ませたビスケットで玉蘭の意志表明を求めたのだと思われる。もし、玉蘭がそのビスケットを食べるのを拒否すれば、彼女は黄の斬首後に、陣営を変えることを意味するのであろう。

では、譚から聞いた玉蘭の話と「僕」自身が見た玉蘭によって「僕」の中で構築された玉蘭のイメージはどんなものか。次に本文から関係部分を挙げて分析する。

⑬その感化を説明する為にはやはり湖南の民自身の負けぬ気の強いことも考えなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶

然ちよつと小説じみた下の小事件に遭遇した。この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるのかも知れない。

⑭額の四角い彼女の顔は唯目の大きいと言ふ以外に格別美しいとは思はれなかつた。が、彼女の前髪や薄い黄色の夏衣裳の川風に波を打つてゐるのは遠目にも綺麗に違ひなかつた。

⑮あの女は黄の情婦だつたんだよ。

⑯彼女は外光に眺めるよりも幾分かは美しいのに違ひなかつた。少なくとも彼女の笑ふ度にエナメルのやうに歯の光るのは見事だつたのに違ひなかつた。しかし僕はその歯並みにおのづから栗鼠を思ひ出した。栗鼠は今でも不相変、赤い更紗の布を下げた硝子窓に近い鳥籠の中に二匹とも滑らかに上下してゐた。

⑰すると玉蘭は譚の顔をみつめ、二こと三こと問答をした。それからビスケットを受け取つた後、彼女を見守つた一座を相手に早口に何かしゃべり出した。(中略)玉蘭は譚の言葉の中にいつかもう美しい歯にビスケットの一片を噛みはじめていた。

右の⑬から「僕」は小事件の主人公玉蘭を「負けぬ気の強い」「情熱に富んだ」湖南人として認識し、好意を示したことが読み取れる。

⑭からは「僕」の玉蘭への第一印象は「格別美しいとは思はれなかつた」であることが確認できる。⑮はもつとも重要な箇所で、玉蘭の身分は黄六一の情婦だったのである。⑯では、妓館で「僕」と玉蘭の再会する場面が描かれる。黄六一が斬首されたため、玉蘭は黄

の情婦である身分を失くした。しかし、黄六一の情婦である身分を喪失した玉蘭（栗鼠）は物語上の重大の意味をなくしてしまう。つまり、革命性をなくなってしまうことを意味する。革命性を失くしてしまえば、玉蘭はただの芸者になってしまう。そうすると、「小事件」は無意味のものになってしまうのだ。なので、玉蘭は黄の情婦であり続けなければならない。しかし、黄が死んだ後、彼女はとうやうや自分の黄の情婦である身分を奪還するのか、それは⑯によつて明かされる。⑰からは、玉蘭が黄の血を染み込ませたビスケットを食べたことが確認できる。これは意地を張るためだけではなく、黄の情婦である身分を奪還するためだと思われる。玉蘭は一見して「小事件」の主人公のようだが、実際、「小事件」の潜在的な主人公はほかではなく、黄六一である。そのため、玉蘭は最後まで黄六一の情婦であり続けなければならない。そのような玉蘭をよりよく理解するために、ここでは二つのキーワードを挙げてみる。一つは「情婦」であり、もう一つは「栗鼠」である。

まずは「情婦」についてである。

黄六一の情婦であることは黄の仲間であることを意味している。従つて、玉蘭の持つている革命性を仄めかす反政府側の人間としての「負けぬ気の強い」「情熱に富んだ」特質をどう解説すればいいか。やはり芥川は肯定的に中国の新時代の動きを読んだのではないか。勿論その新時代の動きには、当時の中国人の反日運動も含まれている。^⑱

次は「栗鼠」についてである。

前に挙げた本文を読めば分かるが、「栗鼠」は玉蘭の暗示である。「栗鼠」は「赤い更紗の布を下げた硝子窓に近い鳥籠の中」にいるのだが、ここの「赤い更紗」は色の暗示であり、「赤化——共産党

との関わり」（溝部優美子）があるという意味を持つているかもしれない。栗鼠は鳥籠の中にいる自由を失った存在であるが、しかし、自由がなくても「栗鼠」は常に動いている動物的能量を持っている。それだけではなく、「栗鼠」には自分の武器も持っている。それは栗鼠の歯である。

右の二つのキーワードから玉蘭は革命性を持つている黄六一の仲間としての性質を持つており、自由が失われた今でも「栗鼠」的な動物的能量を持つていている人物であることが分かる。芥川はこのような玉蘭に「負けぬ気の強い」「情熱に富んだ」という特質を見出した。

四

「湖南の扇」において、含芳も玉蘭と同じくらい重要な人物である。その重要性は主に彼女の持つている「扇」に現れている。前述したことが、「扇」が本文の「起」と「結」の部分に二度登場し、作品のタイトルにもなつていいるため、その重要性は言うまでもない。扇を持つていいる含芳の人物造型を明らかにすることと「扇」の意味を読み解くことは切り離しては行つていけない作業であるため、ここでは本文中の含芳と扇の関係部分を一緒に挙げて分析する。

⑱ 僕は棧橋の向うに、——枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を発見した。彼女は水色の夏衣裳の胸にメダルか何かをぶら下げた、いかにも子供らしい女だつた。僕の目はあるいはそれだけでも彼女に惹かれたかも知れなかつた。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑

を浮かべ、誰かに合い図でもするように半開きの扇をかざしていた。……

⑱僕は京調の党馬や西皮調の汾河湾よりも僕の左に坐つた芸者に遥かに興味を感じていた。

僕の左に坐つたのは僕のおととい沅江丸の上から僅かに一瞥した支那美人だつた。彼女は水色の夏衣裳の胸に不相変メダルをぶら下げていた。が、間近に来たのを見ると、たとい病的な弱々しさはあつても、存外ういういしいところはなかつた。僕は彼女の横顔を見ながら、いつか日かげの土に育つた、小さい球根を考えたりしていた。

⑳「この人の言葉は綺麗だね。ㇿの音などは仏蘭西人のようだ」「うん、その人は北京生まれだから。」

㉑僕等の話題になつたことは含芳自身にもわかつたらしかつた。彼女は現に僕の顔へ時々素早い目をやりながら、早口に譚と問答をし出した。(中略)

譚はこう言う通訳をした後、もう一度含芳へ話しかけた。

㉒「ふん、どうしても白状しない。誰の出迎えに行つたと尋んでいるんだが。……」

すると突然林大嬌は持つていた巻煙草に含芳を指さし、嘲るように何か言い放つた。含むは確かにはつとしたと見え、いきなり僕の膝を抑えるようにした。しかしやつと微笑したと思うと、すぐに又一こと言い返した。僕は勿論この芝居に、——或はこの芝居のかげになつた、存外深いらしい彼等の敵意に好奇心を感じずにはいられなかつた。

㉓僕はこう言う説明を聞いても、未だに顔を見せない玉蘭は勿論、彼女の友だちの含芳にも格別気の毒とは思わなかつた。けれども含芳の顔を見た時、理智的には彼女の心もちを可也はつきりと了解した。彼女は耳環を震わせながら、テエブル

のかげになつた膝の上に手巾を結んだり解いたりしていた。

㉔含芳の立ちかかると見ると、殆ど憐みを乞うように何か笑つたりしゃべつたりした。のみならずしまいには片手を挙げ、正面の僕を指さしたりした。含芳はちよつとためらつた後、もう一度やつと微笑を浮かべ、テエブルの前に腰を下した。僕は大いに可愛かつたから、一座の人目に触れないようにそつと彼女の手を握つていてやつた。

㉕僕はこう言う話の中に玉蘭の来たのに気づいていた。彼女は鴛婦と立ち話をした後、含芳の隣に腰を下ろした。

㉖僕は体の震えるのを感じた。それは僕の膝を抑えた含芳の手の震えるのだつた。

本文からの引用が長いが、右の文から以下の点が確認できる。

○「僕」は「子供らしい」含芳に惹かれた。(⑱参照)

○含芳は半開きの「扇」を持つていて、いかにも古典的な雰囲気有している「美人」である。(⑱参照)

○「僕」は含芳を「日かげの土に育つた、小さい球根」のように思った。(⑱参照)

○含芳は北京生まれである。(⑳参照)

○含芳は子供のように単純で忍耐強い人である。(㉑㉒㉓㉔参照)

○「僕」は含芳が「大いに可愛かつた」。(㉔参照)

○譚と林大嬌は含芳に敵意を抱いている。（②参照）

○含芳は玉蘭の友だちである。（⑳㉑㉒参照）

右の文から分かるが、「僕」は含芳にかなり好意的である。その原因を推測してみると、子供らしい、古典的で、北京生まれ、忍耐強さなどのキーワードを挙げることができる。芥川は北京が好きで、北京生まれの古風な含芳には好意を持っていることは不思議ではない。この含芳のイメージは「上海遊記」の「南国の美人」の花宝玉のイメージ^㉑と相通ずるところがある。「上海遊記」において、芥川は古典的で、堅忍さを持つている花宝玉をかなり好意的に描いたのである。このような含芳と花宝玉から芥川の中国人女性に対する好みがわかるのであろう。では、含芳の人物造型をよりよく理解するために、ここでは「玉蘭の仲間」「球根」「扇」という三つのキーワードを挙げてみる。

・玉蘭の仲間

含芳は黄六一の情婦である玉蘭の仲間であることは非常に意味が大きい。先述の通り、黄六一は単なる土匪ではなく、革命性も持ち合わせている人物である。黄六一の情婦として、玉蘭も当然同じ立場である。そのような玉蘭の仲間であるため、含芳も黄と同じ陣営にいる人間だと想像できる。それがゆえに、反対側の陣営にいる譚と林大嬌に敵意が抱かれたのだ。

・球根

「鳥籠の中」で「滑らかに上下」する栗鼠のイメージを持つ玉蘭と違い、含芳は「日かげの土に育った、小さい球根」というイメージである。これは「栗鼠」の動物的なイメージと、「球根」という

植物的なイメージの二項対立構図である。動物的なイメージはエネルギーが満ちて、常に動いているのに対し、植物的イメージは無害で、静かで可愛らしい。もし、動物的イメージは近代的な革命都市の湖南を代表する玉蘭であれば、植物的イメージは古典的な中国を代表する含芳であると言えよう。「球根」はこの対比を出すために使われたと思われる。

・扇

⑳彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰かに合い図でもするように半開きの扇をかざしていた。……

㉑僕は食事をすませた後、薄暗い船室の電燈の下に僕の滞在費を計算しだした。僕の目の前には扇が一本、二尺に足りない机の外へ桃色の流蘇を垂らしていた。この扇は僕のここへ来る前に誰かの置き忘れて行つたものだった。

右の文が示したように、「扇」の登場場面は小説の最初と最後になつている。つまり「僕」が長沙に着いた直後と長沙を立つ日である。このような形で小説を貫いた「扇」の持つ意味は大きい。小説の半ばぐらいになつてわかることであるが、「扇」を持つている人物は含芳である。しかし、小説の最後に出てくる扇は誰のものなのかは明かされていない。ただ、㉒の「桃色の流蘇」という文面から推測すると、女性の持ち物であることは間違ひなからう。ここを小説の冒頭部分と考え合わせると、恐らく含芳の持ち物であることが考えられる。では、なぜ含芳の扇が船室の中に置き忘れたかという問題が出てくる。これについて、藤井省三は次のように解釈している。

「我」离开长沙时在房间里发现了一把「扇」，可能是妓女给「我」留作纪念的，但「扇」的主人所代表的北京式的「支那情趣」在革命地湖南的激情面前已然无力形成文学主题。这是芥川本人对「支那情趣」的诀别。「僕は長沙を立つ時、船室にある「扇」の存在に気づいた。妓女の「僕」への記念品かもしれない。しかし、「扇」の持ち主によって代表される北京式の「支那趣味」は革命地である湖南の「情熱」を前にして、すでに文学上の主題として成り立てない。これは芥川自身の「支那趣味」への決別を意味している。」（「芥川龍之介「湖南の扇」と佐藤春夫「女滅扇綺譚」『北京・都市想像と文化記憶』陳平原・王德威編 北京大学出版社 二〇〇五年 筆者訳）

確かに、「扇」は古典中国、しいては芥川の「支那趣味」を表す小道具であることを否めない。しかし、船室に置き忘れた「扇」は芥川の「支那趣味」への決別を意味するのだろうか。というのは、「僕」は船室の「扇」をもらって、日本に持ち帰るかもしれないからだ。「僕」の含芳への態度から推測すると、むしろこの可能性が大きいと言える。これはやはり長沙という都市に古典の中国がもう存在しない、古典的な中国は「僕」のような日本人旅行者の心の中心に存在しなくなったことを意味するのではないか。

五

芥川が湖南省の首府長沙を訪れたのは、一九二一年五月二十九日から六月一日までの三泊四日である。旅行後の芥川は「雑信一束」の中で、長沙のことを次のように書いた。

六 長沙

往來に死刑の行われる町。チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞こえる町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいける町、鶏さえ僕を脅すように「アクタガワサアン！」と関をつくる町、……

「新思想」「死刑」「チフスやマラリア」などの言葉は当時の湖南を理解するキーワードである。「新思想」というキーワードは文化の先頭に立つ長沙のイメージが浮き彫りにされている。「死刑」は当時の湖南政府と反政府側（革命者・土匪）との軋轢が暗示される言葉である。カタカナで明記される「チフスやマラリア」から近代の西洋が連想される。これらのキーワードから当時の混乱した長沙の社会情勢を窺うことができる。「湖南の扇」において、芥川は「僕」が遭遇した「小事件」によって湖南の社会情勢を日本社会に伝えようとした。そして、このような土地で生きている革命性を持つている黄六一の情婦である玉蘭、玉蘭の仲間である古典的な含芳へ、好意的な態度を示している。

芥川が、このような玉蘭と含芳を描いたことは、彼の旅行中の中国人女性、ひいては、当時の中国人に対するイメージの現われであると言える。それと同時に、「湖南の扇」は近代になりつつ湖南の社会情勢を表した一方、この作品を「將軍」（改造）第四卷第一号一九二二・二・一）や「桃太郎」（サンデー毎日）二一八号一九二四・七・一）といった作品の続篇として、芥川の帝国主義侵略者への抗議を示した作品であるという読み方も提示できよう。

※本文の引用は全て『芥川龍之介全集』（全二十四巻 岩波書店 一九九五～一九九八）に拠る。

※本文は「第50回教育部留学帰国人員科研启动基金」というプロジェクトの中間報告である。

注釈

- (1) 文芸春秋社 一九二七・六
- (2) 山梨県立文学館 一九九三・十一・三
- (3) 『日本文学』一九七二・十一
- (4) 『国文学』一九七七・三
- (5) 『芥川龍之介「湖南の扇」』『国文学 解釈と鑑賞』一九九七・十二
- (6) 『湖南の扇』——含芳の「扇」を糸口として『日本女子大学紀要』文学部 一九九三・三
- (7) 施小焯は「小説中で大きな役目を担う（人血ピスケット）」という小道具の源を「魯迅の（人血饅頭）に行きつく」とし、そして、「その（人血ピスケット）をかじる、湖南人としての「玉蘭」の「片意地」のイメージは、訪中準備のために目を通した「湖南」にその淵源がある」と、玉蘭の「片意地」のイメージが芥川が読んだ『湖南』にあると指摘している。（『国文学研究』早稲田大学国文学会一一七集 一九九五・十）
- (8) 単援朝は「芥川龍之介「湖南の扇」の虚と実——魯迅の「葉」をも視野に入れて」という論文の中で、「彼（芥川）にとって玉蘭のような「情熱に富んだ湖南の民」が生活する中国は、単に完璧な「趣味」性の裡に鋭く把握されたエキゾチシズムの対象、ないしは「不自然な障碍を避ける為」の方法としての「異国」に終わるものではなく、美しいものと野蛮なもの、現実と非現実が常に混在する不思議な土地、たくましい行動力、生命力への憧憬が託された絶望的な（救済）の場でもある。これは末期の眼で見た現実の中国でありながら自分の中の中国でもある」と玉蘭像に晩年の芥川を重ねたのである。
- (9) 『日本研究』第二十四集 国際日本文化研究センター紀要 二〇〇二・二二
- (10) 『九日日文』九州大学日本語学会 二〇一〇・三
- (11) 劉耕毓は「湖南の扇」論——中国革命との関連をめぐって——（同注9）において、黄六一の名前は井上紅梅の「匪徒」に出てくる匪徒の首領黄四籟王と藍六一の組み合わせであることを突き止めた。次に『匪徒』の「泥

幫」の「馬賊譚」からその関係部分を以下に引用する。

蓋し一幫は一千乃至五百の人数で各首領があつた。その首領は衆人に推舉された者で必ず人を驚かす業を持つてゐた。

鑽天燕子は山嶺を越ゆること飛ぶが如く、法螺も交じつてゐるだらうが一日八百里を走るといふ代物である。

黄四籟王は馬上に銃を取り百歩の距離で人の左眼を撃ち其仆れるを待たずして右眼を射るといふ達人である。

托什套、燕翼子は孰れも百歩の外で二挺の銃を取り百發百中。独眼龍は擲彈を握つて飛走し百發百中、爆聲あつて姿を見ずといふ早業。藍六一は重さ五百斤の物を片手で上げるほどの強力。

以上の如く首領は孰れも非凡の豪傑で部下と甘苦を共にし贓物の分配を公平にして少しも多く取らない。であるから部下は首領を父母のように思ひ、難あれば身を捨て、救ひ、其指揮は一として聽従しないことはない。（傍線引用者 以下同）

右の文から、黄六一の名前はここを参照した可能性が高いことが分かる。それだけではなく、黄六一の業も右から参考したと思われる。例えば黄六一の「右の手には小銃を持ち、左の手にはピストルを持つて一時に二人射殺す」という業は右の黄四籟王の「馬上に銃を取り百歩の距離で人の左眼を撃ち其仆れる」という業に似ている。ちなみに、黄六一の武勇談に出てくる「樊阿七」の名前も同じ『匪徒』の「泥幫」から参照したと思われる。以下関係部分を引用する。

此男は樊川生まれの劉阿七といふ者で老漢とは豫ねて師弟の間柄である。

（泥幫）「缸の中の瓢」
名捕樊七は今度其筋の命令に依り或る重大事件を探索するといふ噂があつた。（泥幫）「針吹く女」

このように、芥川は『匪徒』を読んだ可能性が高いと思われる。

(11) 『雑信一束』（『支那遊記』改造社 一九二五年十一月）の「学校」に、「女学生は皆排日の為に鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具へ、幾何や代数をやつてゐる始末だ。次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰ふと、教師愈仏頂面をして曰、「それはお断り申します。

先達もこの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起した後で「すから！」という記述がある。また、江口渙は『わが文学半生記』（日本図書センター 一九八九・十）において、芥川が自分に述べた長沙師範学校参観について、次のように回想する。

女学生たちは日本が帝国主義的侵略をやめるまでは断じてこの運動はやめないといっている。その決意と闘志のはげしさを実際に見たとき、芥川はもう少しで涙が出そうになるほどの感動に打たれた、といっていた。「中国人という民族は全くたいした民族だね。いまに見たまえ。いまに、君。中国はたいした国になるよ。」

(12) この話のあとで芥川は感慨ぶかい表情とともにこうつけ加えた。

(12) 周知のように、芥川が一九二二年の中国旅行の中で一番気に入った都市は北京である。青柳達雄は『支那遊記』の中で、北京の芥川だけは生き生きとしてゐる。(中略) 支那服を着こんで毎日北京の街を「東奔西走して」ゐる芥川の様子が、いかにも楽しげに見えるのは政治向きの話でなく、画や書や芝居といった芸術に夢中になっているからである。(『芥川龍之介と近代中国序説(承前)』—関東学園大学紀要 第十六号 一九八八・十二)と述べた。芥川が北京が好きになったのは、芸術への陶醉を北京から得たためだといえる。北京は芥川が中国にわたる前に憧れていた古典の中国であると言ひ換えることもできる。そのため、芥川が北京生まれで、しかも古典的な美人である含芳に好意を示すのは必然であろう。

(13) 花宝玉が「南国の美人」に描かれている中で重要な部分を次に引用する。

その時にもう林黛玉の跡に、新に来た芸者が坐つてゐた。これは色の白い、小造りな、御嬢様じみた美人である。宝尽しの模様を織つた、薄紫の緞子の衣裳に、水晶の耳環を下げてゐるのも、一層この妓の品の好さを助けてゐるのに違ひない。早速名前を尋ねて見たら、花宝玉と云ふ返事があつた。花宝玉、——この美人がこの名を発音するのは宛然たる鳩の啼き声である。私は巻煙草をとつてやりながら、「布穀催春種」と云ふ杜少陵の詩を思ひ出した。(中略)

其処の電燈の下には、あの優しい花宝玉が、でつぷり肥つた阿嬢と一しよに、晚餐の食卓を囲んでゐた。食卓には皿が二枚しかない。その又一つは菜ばかりである。花宝玉はそれでも熱心に、茶碗と箸を使つてゐるらしい。私は思はず微笑した。小有天に来てゐた花宝玉は、成程南国の美人かも知れない。しかしこの花宝玉は、——菜根を噛んでゐる花宝

玉は、蕩児の玩弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感した。

芥川は「小有天」の花宝玉を好意的に描いた。「小有天」で「林黛玉の跡に」来た「芸者」は花宝玉である。花宝玉は「品の好」い「御嬢様じみた美人」で、「杜少陵の詩」を思い出させる名を持つ「芸者」である。さらに、芥川は「菜根を噛んでゐる花宝玉」に「蕩児の玩弄に任すべき美人以上の何物」を見出したのである。恐らく芥川が彼女に形象したのは中国の古典に現れる「美」と、中国庶民が持つ素朴さと堅忍さであろう。「菜根を噛む」花宝玉はすでに単なる「芸者」ではなく、中国の「美人」を代表できる人物であると言える。「古典的」「堅忍さ」を有する彼女は含芳と相通するところがある。

(14) 十九世紀末から二十世紀前半まで、湖南の新思潮運動が数多くあつた。主に維新運動、留日運動、共産党思想の流行などが挙げられる。芥川の訪中時には特に留日学生たちが主導する各種の運動があつた。黎躍進の「二十世紀前半湖南留日運動及びその特徴」(『文史博覧・理論』二〇〇五年六月)によると、二十世紀前半の湖南省の留日学生の人数は全国各省の中で前十位に入るほど多かつた。(なお、十九世紀末から二十世紀前半までの中国全国留日学生人数に関して、『中国人日本留学史』(実藤秀恵 三聯書店 一九八三年)、『近代中国留學生』(李喜所 人民出版社 一九八七年)、『中国留學生大辞典』(周棉編 南京大学出版社 一九九九年)、『清末浙江と日本』(呂順長 上海古籍出版社 二〇〇一年)などの文献が参考できる。)そのため、留日学生が主導した運動、或いは参加した運動も多数あつた。例えば、自立軍蜂起(一九〇〇)、萍・浏・醴蜂起(一九〇六)、広州黄花岡蜂起(一九一一)、辛亥革命(一九一一)、二十一か条反対運動(一九一五)、五四運動を声援する五七運動(一九一九)などがある。ほかに留日学生によって作られた機関誌も多数あつた。例えば『湘路警鐘』『遊学訳編』『二十世紀の支那』『洞庭波』などが挙げられる。